



国際ロータリー第2610地区 南砺ロータリークラブ
クラブ会報

な ん と

NO. 2079



URL <http://www.nanto-rc.jp>

E-mail office@nanto-rc.jp

例会日/火曜日 12:30点鐘 例会場/金沢信用金庫福光支店4階 ◆事務局/富山県南砺市福光7336-4 ふくみつ光房内 ☎ 0763-53-1333 FAX 53-1334

撮影

写真同好会

中田
修会員



室堂平のタテヤマリンドウ

第2139回例会 平成23年8月15日(月)晴

早朝例会 城端別院 善徳寺 講堂

◆点鐘 6:15 司会 税光信作SAA

◆ソング「それでこそロータリー」

◆ゲスト 城端別院 善徳寺輪番 鶴松 瑩師

◆会長の時間 松井洋司会長

お早ようございます。早朝のお集り御苦勞様です。善徳寺本堂でのお勤めを拝聴し、実に清々しく、心洗われるような気持ちです。何時ごろから恒例となったのか、先輩会員の企画に敬意を申し上げたいと思います。※1

本日はお盆、そして戦後66年目の終戦記念日です。300万人ともいわれる戦没者の冥福を、そして今年、3月11日の東日本大震災の犠牲者のご冥福を共に心よりお祈り申し上げます。又一日も早い復興を祈念したいものです。

各々の御家庭では故人を偲び、先祖に心を思い遣り、家族の安泰、健康を願い、現在の平安である事を改めて感謝したいものです。

8月15日は日本人にとって特別の日です。戦争について、平和を維持し続ける事の努力について、世界(他国)と日本、日本国、日本国民等々、私達は今少し、国を意識する機会があってもいいのではないのでしょうか。現在、いろんな場面で日本の将来を危くするような現象が起こりつつあるように思われますが如何でしょうか。

この後、輪番鶴松様の法話をお聞きすることになっていきます。とかく生きにくい世に、何かヒントをお与えいただければ幸甚です。

(※1 昭和47年(伊藤克己会長、西川雄策幹事の年度)山下宗八) プログラム委員長の発案により行われ、以来恒例の行事となった。

◆出席報告 古瀬喜八郎委員長

会員数	8月15日出席率	8月2日の修正
53 (免除1)	71.15% (欠15)	80.77% (欠10メーク2)

メーキャップ 古軸裕一君 松本敏博君

◆ニコニコBOX

山田英敏副委員長

松井君 善徳寺の朝、実に清々しく、心洗われるような気持ちです。なんまんだぶつ。

中田修君 今年も別院にてお盆を迎える事が出来ました。

南部君 気持ちが、いいです。いい盆になればいいですね。

古軸君 今年もお盆例会を別院で迎えることができ、早朝より清々しい気持ちです。

荒井君 盆前中はありがとうございました。

高野君 本年は、出席する事が出来幸せです。感謝。

松本一君 今日、この後県主催の「戦没者追悼式」に参加します。

木村君 今年のお盆は、例年と変わらず迎えました。ありがたいことです。

西川君 今年も早朝例会に出られました。

片山浩君 城端別院の例会楽しみです。今回で15回目です。

川合君 今年も、別院での早朝例会。有難うございます。

岩木君 お盆例会に参加して。

牧君 今年も元気で別院の朝に参加できました。

安谷君 お盆。先祖に感謝して、父65年、母満50年、兄20年、姉25年、家族全員向うで私を見守ってくれています。

米田君 お盆もしっかり身体に気をつけていこうぞー。

木本君 早朝例会に別院に来ました。

上坂君、岡部君、松村君、北島君、船藤君/

早朝例会に参加して。

高田君 城端へようこそ。

三吉君 66年前の今日、思い出しております。

川田君 今年も変わりなくお盆のお参りが出来ました。

渡邊君 早朝例会に参加して。

藤田君 お盆例会別院にお参りして。

細川君 健康でお盆の例会に出席することができました。

澤田君 清々しいお盆の朝、毎年この日は心が洗われます。

吉田君 本日はよろしくお祈りします。

山田英君 蓮如上人ゆかりの善徳寺での例会、心落ち着いた気持ちです。お墓は帰って、ありがたい心をもってまいります。

井沢君 終戦記念日に想いをよせて。

本日のプログラム 8月23日(火) 第2140回
IA情報

インターアクト委員長 岩木貴之会員担当

次回の予定 8月30日(火) 第2141回
第4分区分ガバナー補佐 齊藤寿雄君来訪

会長 松井洋司君 担当



私共は毎日を快適に日暮しが出来れば何よりのことですが、そういう快適さを常に邪魔して来るものがございます。それが他ならぬ生きている身の事実としての「老病死」と言うものでございましょう。私も何時の間にか座骨神経痛に悩まされる年齢となりました。歳がいけばいったで、若い時には感ぜられなかった不自由さ、老いの苦しみと言うものがございます。食べ物一つ口に入れるにしても、入歯が増えるに従って、ご飯粒を白衣の上に落とすは、お酒をこぼすは、しみだらけにして、家内に叱られて居ります。昔から年寄り「きたながれる」と云われますが、回りの人に不快感を抱かせて、辛抱して戴いている身です。そうしますと私共が生きていることの内容が「老病死」ということになります。

そこに、ほんとうに生きると言うことは、どう云うことなのか。このことが問われています。ご存知の如く、お釈迦様は「老苦」を無くして「病苦」を無くして、より快適な日暮しが成立つ道を求められたのではないことでした。恐らく宗祖聖人に課題となったことも、私共が「老病死」を無くして、そして生きる快適さを如何にしたら満足させることが出来るかと云うことでなかったことと思われまます。奥様の「恵信尼」さまがお書きになられたお手紙に、宗祖聖人が比叡の山を下りられて、六角堂へ百ヶ日ご参籠になったことが書かれてあります。そこには、どう云うてご参籠になったかと云えば、『たゞ一筋に後世をいのらせたまう』とあります。そして、九十五日の暁に、聖徳太子の示現にあずかれて、吉水の法然上人をお尋ねになられます。その時どう云うて法然上人をお尋ねになったかと云えば、『後世の助からんずる縁にあいまいらせん』とあります。

共に「後世」とあります。この「後世」と云うことで何が問題であったのでしょうか。「金子大栄」先生は、次のように仰って居られます。

『人間の生活と云うものを静かに振り返って見る時、人間と云うものは、偉そうなことを云っておるけれども、生きんが為とは云いながら、生き物の命を平気で奪い、同じ一つ屋根の下に居りながら、親子・夫婦・兄弟がお互いに腸（はらわた）の中で目くじらを立てあいながら人間同士が争わねばならない。そう云う人間生活を見ると云うと、それで済むのかしらん。それで人間らしさを保っておることが出来るのかしらん。そこに人間生活のあさましさと云うものが感じられるのでございます。そこに、こんな人間生活をしておるのを見ると云うと、さて「後の世」はどうなるのであろうか。「後の世の恐ろしさ」と云うものは、何も「後の世」と云うものがあると云うことを決めてから感じたのではないのでしょうか。「後の世の恐ろしさ」と云うことは、つまり現世の生活と云うものを未来へ移して見たのでありましよう』と。

このように仰って居られますが、成程そうなのでありましよう。

そうすれば、「後世の助かる道」と云うことは、逆に人間生活のあさましさと云うものを知らせて下さっておることになります。

その「後世の助からんずる縁にあいまいらせん」と、宗祖は法然上人をお尋ねになられた。それに対して、法然上人はどうお答え下されたのかと申しますと、

『後世のことは、良き人にも悪しき人にも、同じように生死出ずべきみちをば、たゞ一筋に仰せられ候いしを受け給りさだめて』とございます。今、こゝに「生死出ずべきみち」とあります。つまり、現世の苦しみ、悩みを出ることが出来る道と云うことです。そうしますと、後世が課題になると云うことは、現世の日暮しが解決されていないと云うことになります。その「生死出ずべき道」を宗祖聖人は法然上人からどう受け取られたかと申しますと、『親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられまいらすべし』と。「たゞ念仏」が生死の苦しみを出ることの出来る道であると。私には、今は亡き「辻さん」と云うお同行の方が懐かしく思いおこされてまいります。「辻さん」がまだお元気の頃、或る年の正月明けに、聞法会の会場で久し振りにお会いした時のことでした。年明けの挨拶を終えてふと見ると、左手の親指に実に痛々しく感ずる白い大きな包帯を巻いて居られます。「その包帯どうされたのですか」とお尋ねしますと、「七十過ぎて居るのに、これでもまだ土方に出ていまして」と仰っしゃるのです。

「去年の暮れ、雨・霰の中、道路の拡幅工事に出て居りまして、ふとしたはずみでブロックでこの親指をつぶしてしまひましてね」と。「そりゃー痛かったでしょう」と申しましたら、「痛いなの、目から火が出る程痛かったですわ」と云われるのです。私が「早く治ると良いですね」と云って別れようとしたら、向うから私を引き止めるようにして仰っしゃるのです。「ご院はん、この指をつぶしたお蔭で、仏さまの教えがよう聞こえてくるようになりました」と、私の前で手を合わされるのですね。私は思わぬ言葉とお姿に出会ったものですから、思わず知らず、聞き返しました。そうしたら仰っしゃるのですね。

『私は餅が好きなんです。餅が傷口に悪いからと云うて、折角の正月やけど、その餅も口にすることもなく、我慢して居りました。ところが、正月の間中、若い者がテレビを見ながら、餅の好きな「じいじ」を前にして、ストーブの上でどんどん餅焼いて。いかな俺（おら）やったして、その中（うち）にでかい声の一つも二つも出ました』と。『この餓鬼どもが、畜生どもが』と。

ところが、そうではなかったのですね。餅は傷口によくないと知って居りながら、食べたいと云うて居る私が餓鬼道に落ちて居ったのではなかったのでしょうか。人の喜びと一緒に喜べない、路傍の人となって居ったこの「じいじ」が、畜生道に落ちて居ったのではなかったのでしょうか。このことがお念仏と共にいたゞかれたら、嘘もかくしありません、この痛い指が拝まれましたと。「南無阿弥陀仏」と仰っしゃるのですね。

痛い指が「南無阿弥陀仏」と拝まれるところには、痛い痛いとなって居らない、苦を乗り越えて生きて居られるお姿を拝見したことでした。

(今回の会報担当 岩木貴之)